

幻の大房寺

利根川の支流梵天川は、川俣より南へと流れ、大房寺の境内を横切り中川に合流します。

大房寺の開山は明らかではありませんが、寺の偉容さは、北武蔵野屈指の寺と語られています。

「武蔵野の月は大房寺の東門より出て西門に沈む」と、たとえられ、四十町歩余りの境内に、静かにたたずむ寺の様は威厳そのものだったとか……。

境内の森はうっそうとして昼なおうす暗く、梵天川の清流に写し出される森は、神秘的で靈験さへ感じ、人々はおのずと心が清浄となって真言の心が宿ったと言われます。また朝夕の鐘のひびきは、貧しい農民たちの心の安らぎとなったといえます。

清らかな梵天川の水は用水に使われ、穀倉地帯をうるおす大事な水源でした。五穀豊稔の願いや、悪疫をはらう川として、村人に信仰され、梵天祭りが盛大に行われたと古老は語っています。

今は利根川の氾濫によって、跡かたもなく流失されたり



埋没されて、当時の片りんさえ見当りませんが、地名の大房耕地、松葉耕地、梵天川などが、当時の話らいとして名ごりをとどめています。